猿新聞

編集・発行
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp

獣害対策　新年に思うこと

中山間地域では野生動物のエリアと人間エリアの緩衝機能が減少したこと、地球温暖化での生態系の変化や、高齢化のため狩猟人口の減少等々で、被害が年々深刻化しつつあります。

名張地方でも鳥獣被害、が年々増加しております。防護ネットなどで防除は行っていますが、地形等により防護ネットだけでは防除ができないところもあります。それに加え地域により被害認識に温度差があることが、対策の大きな課題となっています。

獣害対策は一定のレベルで継続して取り組むことで効果が発揮されるもので、根負けせず諦めず継続することが、獣害対策の特効薬です。

獣害には、追い払いなどの小手先対策では解決しない根深いものがはらんでいます。

究極の対策は、昔のように、人と野生動物との棲み分けを図ることに尽きると思います。

棲み分けを図るには、野生鳥獣の生息環境にも配慮した緩衝帯の再生と山に、栗、どんぐりなどを植栽して、昔のような野生動物のエサの豊富な森林に造り替えるのが先決です。一度、壊した自然環境を再生するには、年単位の時間が必用です。

だが、次世代のためにどうしてもやらなければならない課題です。

捕獲鳥獣の、有効活用も今年の課題です。

捕獲鳥獣を地域資源として活用することが獣害対策意識の向上にもつながり重要なことです。ひいては地場特産品の創造にもつながります。猟友会での有害捕獲では、殆どが食肉として活用されていますが、ネットに絡まるなどしての捕獲では、残念ながら有効に活用されていないのが現状です。今後は、解体処理方法の研修を広め獣肉料理が、農山村に定着して行くことが望まれます。

今年は、政府が代わり国の予算、支援体制がどうなるのかも、気にかかるところです。

アライグマ捕獲　矢川　田中さんの話

矢川の田中さんは、昨年8月頃から年末にかけて、アライグマ８匹、イタチ７匹を捕獲されています。４ヶ月という短期間でこの捕獲数は驚きです。そこで田中さんに捕獲についてのコツなどを聞かせて頂きました。

開口一番。「根負けせず、諦めないこと！」。

まず、檻の設置場所の選定では、かすかな通り道（獣道）を見逃さないで、通り道に仕掛ける。誘導餌にはポップコーン。檻の中には天ぷらなど脂っ気の多いもの置いておく。踏み板には十分気をつけ捕獲時スムーズに作動するように手入れを怠らない。餌を仕掛けるフックは無視し踏み板の前にえさ箱を置いておく。檻の見回りは毎日欠かさず行い些細な変化も見逃さないようにしている。捕獲後は、檻は入念に洗浄し臭いなどを残さないよう気をつけている。…など。

ご近所の猫などが、かからないよう誤捕獲にも十分気配りをしているとも言われておりました。

■イタチは保護動物に指定されているため殺処分はできない。…？。

イタチは、平野部から山奥まで、広く生息している動物で、魚や鳥などを食べる動物であるため、養魚池や養鶏場にとっては天敵ともいえる存在でした。

最近では、市街地においてゴミを荒らしたり、家屋に侵入したりする被害が発生しています。

これを何故保護指定するのでしょうか？。「ようわかりまへんわ！」。「捕まえたら遠くへ運んで逃がして下さい！」。これでは、まさに『イタチごっこ』。

地域ぐるみの植栽　獣害対策を学ぶ

矢川環境保全会では、全国の先進的な地域の被害対策や研究成果を見聞するための、研修会を岐阜県下呂市で開催。テーマは集落の環境美化、獣害対策です。

今回、山田　泰次さんにお願いし、その概要をレポートにまとめて頂きました。

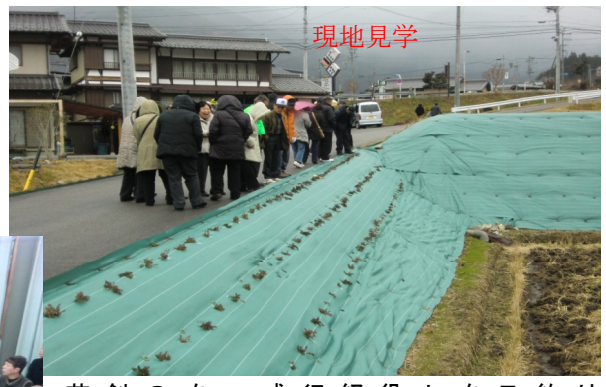
矢川環境保全会書記
山田泰次

矢川環境保全会主催の「環境研修旅行」が12月2日（日）に行われ、参加した35名が岐阜県下呂市にある竹原地区を視察しました。竹原地区は下呂市の東部に位置し、世帯数１１００戸、人口３８００人、農用地面積は約１６０㌶。訪問した野尻地区は竹原地区の中央部に位置し、飛騨川の支流を主な取水源として水稲、コンニャク、トマト、野菜苗作りが盛んな中山間農業振興地域です。農地・水環境保全向上対策事業が昨年度で5か年の実施期間を終了し、昨年から引き続き農地・水保全管理交付金（共同活動）として再スタートしています。

河原良昭代表はじめ関係者の皆様が、バスで約４時間かけて到着した私達一行を歓迎してくださり、公民館を会場に約1時間にわたりスライドを使って活動を紹介。そのポイントは①活動を支える役員（21名）は区長経験者、認定農業士、行政経験者などで構成。②平成１８年に「野尻花の済美隊」を発足させ、田んぼの土手や道路、池の斜面、休耕地などに花桃、彼岸花、シバザクラ、菖蒲などを植え、これを管理しながら見事な景観を創り出している。

③地元猟友会有志、ワナ猟有資格者、消防署OB、トマトや稲作農家などで編成する「野尻　鹿亥猿隊（かいえんたい）」を組織し、箱ワナ（大８台・小４第）、トラップ（くくり罠の類い）５０セットを使い、この３年半でイノシシ、鹿など約１００頭を捕獲したとのこと等です。「獣害対策は個体数を減らすことが基本」だそうで、獣害が減ってきたことで、耕作をやめていた人が再び耕作を始めた」といった事例もあるそうです。

竹原地区では、こうした多彩な活動を掲載した「かわら版」を地区内全所帯に配布、情報を共有しています。美しい農村づくりへの取り組みは、私たち矢川地区においても大いに参考になるものです。参加者は、シバザクラ用の広大な防草ネットの斜面を見学するなど、有意義な1日を過ごしました。



サルの出没状況

名張A群

つつじヶ丘を中心に移動。特徴として動きが早い。今年は柿、栗、葛の実を食べ山中にいることが多い。古川氏によると、A群は毎年夏、青山に移動していたのに、行かなくなったのは、青山にも20頭ほどの群れ（青山A群）がいることが調査で最近わかったので、そのせいで青山に行かなくなったのかもしれない。A群のハナレがつつじガ丘、桔梗に現れる。

A群については、地元の人でメールを打ってくれる人がいない。

名張B群

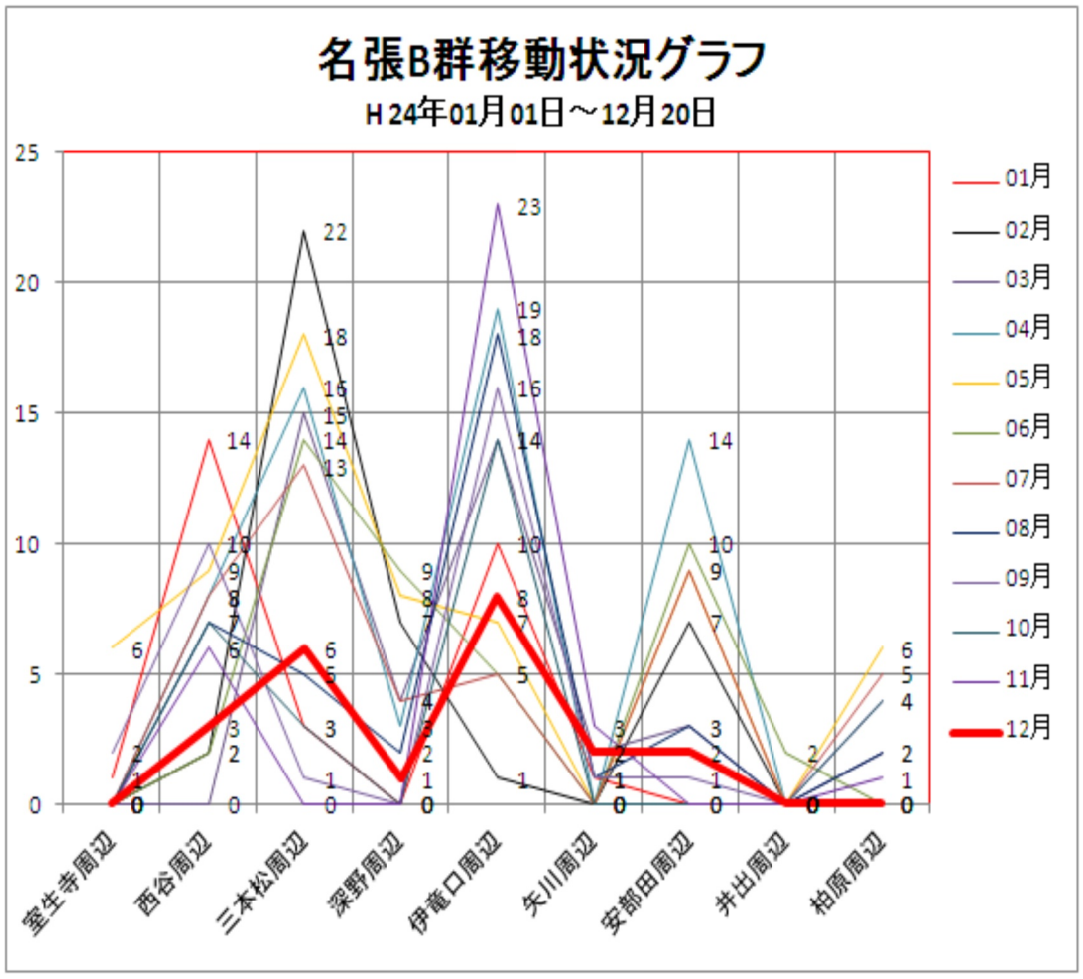
9月になってからは国道を北にわたらなくなって、星川、長坂、竜口、西谷、をメインに遊動をしている。B群には「ハナレ」で足を怪我していると思われるサルが一頭いる。

交尾の時期はハナレが群れに近づいてくる。

（第４回モンキードッグ倶楽部定例会資料より）

編集後記

最近、「はなれサル」の目撃情報が目立ちます。「はなれサル」は、群れから追い出された、「かわいそうなサル」ではありません。若い成体のオスがほとんどで、交尾期には別の群れに合流することもあります。名張群の「はなれサル」は人慣れしていて人を怖がりません。威嚇してくることもあります。

★今年の目標

『防除に普遍的特効薬はありません。根負けせず諦めないことが最善につながります』。